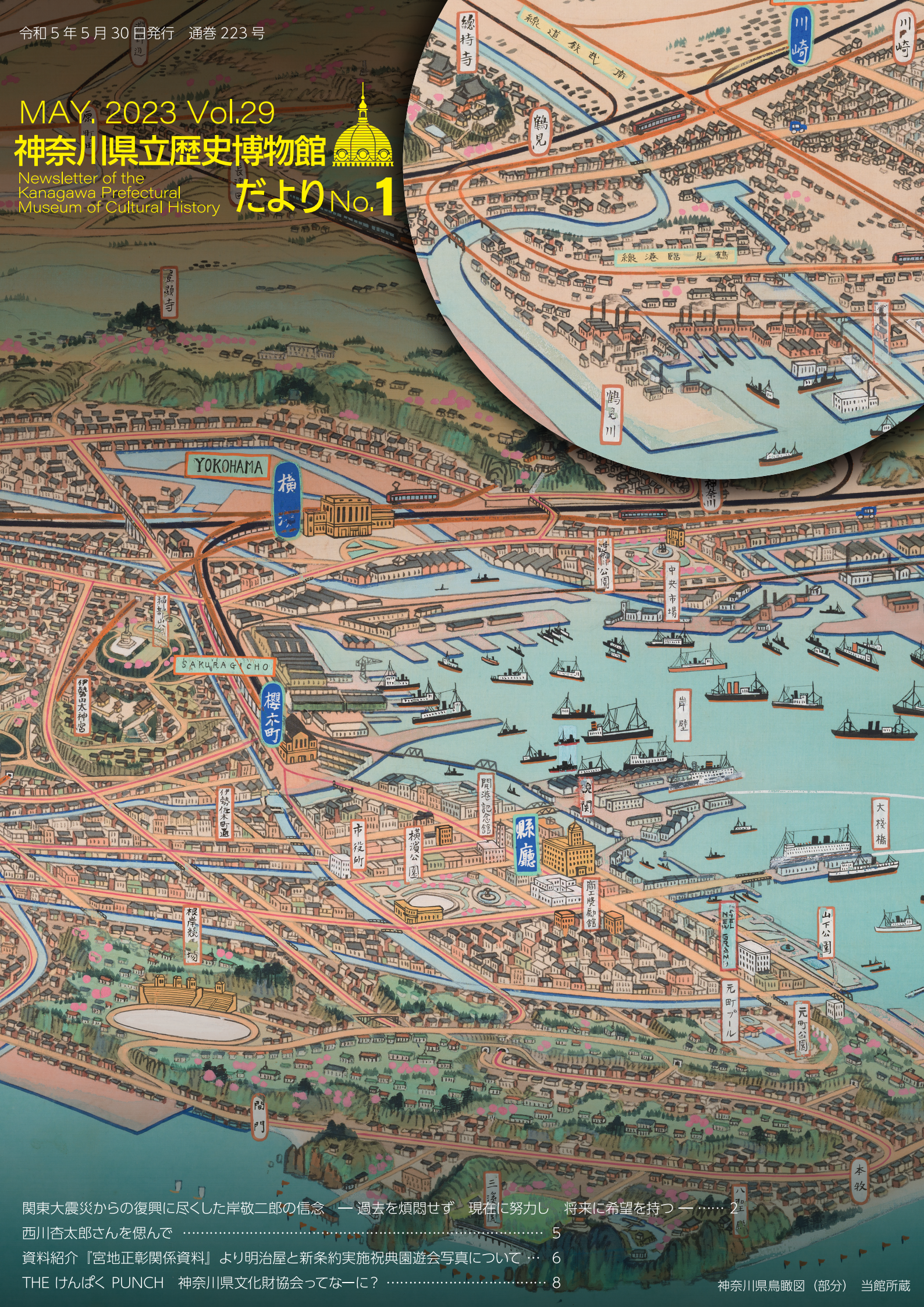
令和５年５月30日発行　通巻223号

MAY. 2023 Vol.29

神奈川県立歴史博物館だより No.1

Newsletter of the Kanagawa Prefectural Museum of Cultural History



関東大震災からの復興に尽くした岸敬二郎の信念　― 過去を煩悶せず　現在に努力し　将来に希望を持つ ― …… 2
西川杏太郎さんを偲んで …… 5
資料紹介『宮地正彰関係資料』より明治屋と新条約実施祝典園遊会写真について … 6
THE けんぱく PUNCH　神奈川県文化財協会ってなーに？ …… 8

神奈川県鳥瞰図（部分）　当館所蔵

関東大震災からの復興に尽くした岸敬二郎の信念

―過去を煩悶せず　現在に努力し　将来に希望を持つ―

関東大震災から 100 年

1923（大正 12）年 9 月 1 日に発災した関東大震災は、マグニチュード 7.9 と推定される巨大地震と、それに伴う火災や山崩れ、津波などによって関東地方から東海地方にかけて甚大な被害をもたらしました。当館の旧館部分である旧横浜正金銀行本店本館は、関東大震災をくぐり抜けてきた生き証人です。また、当館ではこの大災害を「現代」の起点と位置づけ、2003（平成 15）年に特別展「80 年目の記憶―関東大震災といま―」[1] を開催するなど、その記憶を現在に留めてきました。

2023（令和 5）年の今年は関東大震災の発災から 100 年にあたり、当館では 7 月から 9 月にかけて関連する特別展を企画しています。本稿では、関東大震災の被害に直面し復興に尽力したある人物の言葉を通じて、展覧会の意図を紹介します。

【図 1】岸敬二郎の肖像写真
『工学博士岸敬二郎伝』所収　個人所蔵

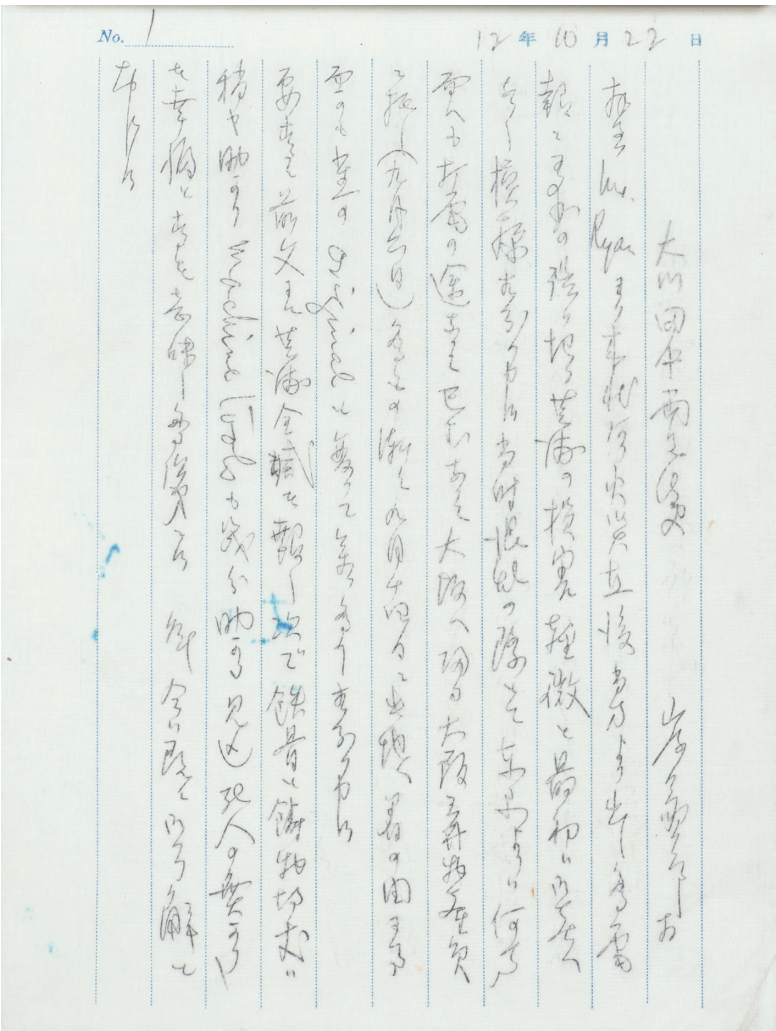
芝浦製作所の岸敬二郎

本稿で注目するのは、芝浦製作所の岸敬二郎【図 1】という電気技術者です[2]。岸は 1869（明治 2）年に和歌山城下（現和歌山県和歌山市）で生まれ、1895（明治 28）年に帝国大学工科大学電気工学科（現東京大学工学部）を卒業すると芝浦製作所に就職しました。芝浦製作所は現在の株式会社東芝の前身の一つであり、1875（明治 8）年に初代田中久重が新橋に創設した工場に端を発します。後に二代田中久重が芝浦（現東京都港区）に工場を移し、1893（明治 26）年には三井銀行が継承して芝浦製作所と改称しました。岸は芝浦製作所の電気部に入り、電気技術者として製品の開発に取り組みました。特に、自身の卒業論文に基づいて開発した二相式誘導電動機は、日本におけるモーター製作の端緒として知られています。岸は、モーターをはじめ多くの電気技術を発明して特許を取得するなど、芝浦製作所の技術開発を主導しました。

岸は、1911（明治 44）年、数え年で 43 歳のときに芝浦製作所の技術部長と常務取締役を兼務するようになりました。当時の芝浦製作所は創業地である芝浦に工場を構えていましたが、事業の拡大に伴って設備の充実を図る必要が生じていました。そこで、1922（大正 11）年に神奈川県橘樹郡町田村（現神奈川県横浜市鶴見区）に約 12.5 万坪の土地を購入して、新たに鶴見工場の建設に着手しました。ところが、翌 1923（大正 12）年 9 月 1 日に関東大震災が発生します。そのとき、岸は 55 歳でした。芝浦にあった工場（以下では芝浦工場と記します）は、地震による損傷こそ大きくなかったものの、発災当日の 1 日夜半に近隣で火事があったため延焼してしまいました。芝浦製作所は芝浦工場の復旧に着手し、震災から約 1 か月半後の 10 月中旬には、業務再開の見通しが立つようになりました。

残された手紙

関東大震災の発生から約 1 か月が過ぎた頃から、復興に尽力する岸の動向が詳しく分かるようになります。岸が関係者に宛てて書いた手紙が多数残されているからです。これらの手紙は、長くご子孫のもとで大切に保管されていたもので、2019（令和元）年に東芝



【図 2】1923（大正 12）年 10 月 22 日に岸敬二郎が同僚に宛てた手紙
東芝未来科学館所蔵

未来科学館へ寄贈されました。その点数は約 480 通に及びます。しかし、考えてみれば手紙は相手に届けられると、ふつうは書き手の側には残りません。実は、現在に伝えられたこれらの手紙は、カーボン紙を用いた複写便箋に綴られていて、原本を相手に差し出した後に書き手である岸の手元に残された控えだったのです。現代社会に置き換えてみれば、メールソフトの送信ボックスに残された送信済みメールとでも例えられるでしょう。

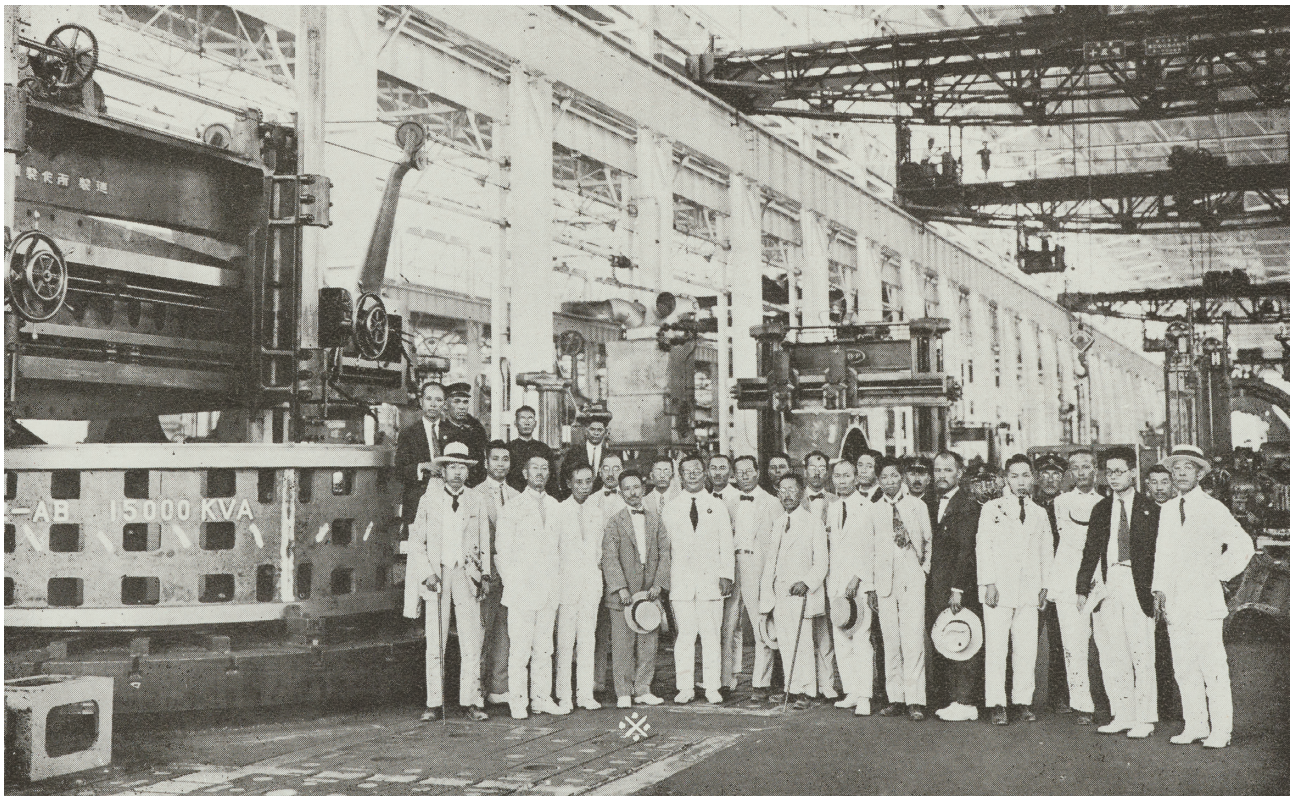
さて、残された手紙のうち、関東大震災の発災後で最も早いものは 10 月 16 日付です。この時期の手紙を読むと、芝浦工場では近くモーター類の製造が始まり、翌年早々には全ての業務が再開できる見込みが立っていた状況が分かります。なかでも 10 月 22 日に岸が同僚の芝浦製作所社員に宛てた手紙【図 2】には、被害や復旧の様子が詳細に書き記されています。これによれば、震災直後には東京から各地へ電報を打てず情報伝達の手段がありませんでした。そこで、岸は大阪へ向かう関係者に文面を託したところ、当初の内容とは異なり芝浦製作所の損害は軽微であるという誤った情報が伝達されてしまう事態が発生しました。実際のところ、芝浦製作所は全滅というべき惨状であり、関係者に死者が無かったのが不幸中の幸いであったほどでしたので、震災後の混乱した状況が見て取れます。この手紙で、岸は復旧にあたって工場内の配置を見直して、工作機械のレイアウトを改善するなど生産の効率が増すように目論んでいる旨を述べています。

岸は、工場の復旧にかける意気込みを手紙だけでなく雑誌に執筆した文章でも表明しています。例えば、1923（大正 12）年 12 月発行の『実業之日本』に寄せた記事では、「徒らに損失を悲観せず、直に前途の光明を望みつゝ復興計画を樹てた」としたうえで、震災による全焼という事態を「工場の配置を理想的に改善する絶好の機会」と捉えていると表現しています[(3)]。被害の大きさを悲観せず、復興に取り組んだ岸の行動は、後に述べるような強い信念に貫かれたものでした。

手応え・もどかしさ・楽しみ

関東大震災から 2 か月が経過した 11 月には芝浦工場の一部が落成し、モーター類の生産も開始される段階に達していました。岸は、11 月 20 日に機械工学者で東京帝国大学工学部教授である加茂正雄に対して手紙を出しています。この手紙で、岸は芝浦製作所の所員や職工一同は緊張感を持って仕事に取り組んでいて、以前に比べて能率が非常に高まるだろうと楽しみにしている旨を伝えています。しかし、手応えを感じながら復興事業に励む岸は、再び強い揺れに襲われました。1924（大正 13）年 1 月 15 日に神奈川県西部を震源として発生した丹沢地震で、マグニチュードは 7.3 と推定されています。この地震で工場に被害はありませんでしたが、東京にあった岸の自宅は損傷してしまいました。

その後、芝浦工場の復旧工事は工程の 9 割近くを終えながらも、あと少しのところで思うように進められない状況になっていました。具体的には、工場で用いるネジ 1 本が足りなかったり、ポール 1 本を紛失してしまったりといった様子でした。岸は、復興事業完成目前のもどかしい心境を手紙に記すなかで、「百里の途は九十里をもって半ばとす」という表現を用いています。「百里を行く者は九十を半ばとす」として知ら



【図 3】1925（大正 14）年 9 月に芝浦製作所鶴見工場を訪れた中華工程師学会一行の集合写真
『工学博士岸敬二郎伝』所収　個人所蔵　（図中の※が岸敬二郎）

れる格言で、最後まで気を引き締めて物事に臨む必要を説いたものです。実際、岸の心掛けは実を結びました。震災から 11 か月が経過しようとする 1924（大正 13）年 7 月 29 日の手紙では、社員が奮闘した結果から芝浦工場が完全に復旧して生産の能率が倍増している状況を受けて、岸は「愉快」であると表現しています。また、岸は、同月発行の『実業之日本』に寄せた記事で、余震が頻発して人々が不安に包まれていた時に復興の計画が機敏に行われたのは、「社員全部が震火災の大打撃を受け復興の意気が真剣味を有して」いたからであり、「社員全部の真剣なる努力」に感激せずにいられないと述べています[4]。

一方で、震災前に着工したばかりであった鶴見工場では 1924（大正 13）年 11 月に主要な建物が完成し、1925（大正 14）年 8 月には機械類の設置が終わりました。芝浦製作所の復興事業が一段落すると、岸は生産が軌道に乗った自社工場の見学を関係者に呼びかけています。岸は、土木工学や建築学を専門とする大学関係者や、自社製品の納入先である顧客に対して手紙を出して、最新設備を導入した自社工場を見学するよう盛んに誘致しました。例えば、1925（大正 14）年 9 月には中華工程師学会の一行が鶴見工場の見学に訪れています【図 3】。なお、本号表紙は 1932（昭和 7）年に描かれた「神奈川県鳥瞰図」の一部で、右上に丸く囲んだ部分に鶴見川河口部を示しました。このうち右下隅にある、海に面した白く四角い建物が鶴見工場です。一帯の工場は煙突から煙をあげていて、震災から 10 年が経とうとする工業地帯の活気がうかがえます。

発災以来、芝浦製作所の復興に尽くした岸は、過労が重なったためか病気になってしまい、1927（昭和 2）年 3 月 4 日に 59 歳で没しました。没する約 1 か月前にあたる 2 月 3 日に知人へ差し出した手紙で、岸は芝浦製作所に入って満 32 年が経過した自身の心境について語っています。岸は、仕事の間に不平を持ったこともなくはなかったが、「過去を煩悶（はんもん）せず　現在に努力し　将来に希望を持つ」という言葉を標語として、日々仕事に打ち込んでいると伝えました。この言葉には、岸が関東大震災という過去に思い悩まず、将来に希望を持とうとする強い信念を原動力として、現在の復興事業に努力していた様子がよく表明されています。

関東大震災を理解するために

以上のとおり、芝浦製作所の電気技術者である岸は、関東大震災で大きな被害を受けた自社の復興事業に取り組むにあたって、手応えや楽しみを感じながら、工場の能率が高まる様子を愉快であると喜びました。その一方で、震災翌年に発生した余震で自宅が再び被災したり、復旧工事の完成一歩手前で材料が揃わなかっ

たりする状況から、もどかしさも感じていました。多忙な日々のなかで揺れ動く感情を抱えながら、過去に悩まず、現在に努力し、将来に希望を持つという信念を貫いた姿は、岸だけでなく、大災害に遭遇した同時代の人たちの間に共通するところもあったのではないでしょうか。

今から100年前に発生した関東大震災について理解しようとしたとき、どうしても被害の惨状が注目されがちです。もちろん被害の実態を知ることは不可欠ですが、それに加えて当時の人たちの心の動きにも目を向けたときに、100年前と現在との接点がより鮮明になるのではないかと考えています。

（学芸員・武田（たけだ） 周一郎（しゅういちろう））

＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊ ＊

註

(1) 神奈川県立歴史博物館編・発行『80年目の記憶―関東大震災といま―』 2003年

(2) 本稿の岸敬二郎に関する記述は、以下の小文に基づいています。

武田周一郎「芝浦製作所電気技術者の岸敬二郎と関東大震災の復興事業」『神奈川県立博物館研究報告―人文科学―』48号　2022年

また、岸の経歴については次の伝記に詳しいため、ご参照ください。

大竹武吉編『工学博士岸敬二郎伝』岸敬二郎君伝記編纂会　1931年

(3) 岸敬二郎「大光明を望んで復興に努力」『実業之日本』26巻21号　1923年　19頁

(4) 岸敬二郎「真剣の力で工場を復興」『実業之日本』27巻13号　1924年　97頁

特別展

関東大震災

―原点は100年前―

開催概要

会期：2023年7月29日（土）～9月18日（月・祝）

休館日：毎週月曜日〔9月18日（月・祝）は開館〕

西川杏太郎さんを偲んで

令和5（2023）年2月24日、西川杏太郎先生がご逝去されました。93歳のご高齢であったからいつかはその時がとは思っていたものの、その訃報を歴史博物館長からもらった時は驚きでした。元気であられた先生のお顔しか浮かんできませんでした。

申すまでなく、先生は、文化勲章受章の書家、西川寧（やすし）氏の長男であり、奈良国立博物館長、東京国立文化財研究所長、文化財保護審議会長など国の文化財保護・博物館行政の要職を歴任され、平成14（2002）年には、勲二等瑞宝章を受けられました。仏教彫刻史研究の重鎮、文化財行政のご意見番であられ、歯に衣を着せぬご言動は、江戸っ子気質そのものといえました。

県立博物館から県立歴史博物館へリニューアルし、県博が過渡期を迎えていた平成14（2002）年に館長に就任され、以来、10年の長きにわたり当館に在職いただきました。

就任直後、学芸部職員は先生にやや近づき難く、私は専門が先生と同じに仏教彫刻史であったので、さらに畏れ多い存在でした。しかし数年の間で、学芸員とも心から打ち解け、様々にご指導をいただくようになり、仕事後の御酒の付合いもしばしば、県博のアットホームな環境を先生も楽しんでおられました。先生の「県博愛」はとても深いものであり、私はそれが国立機関在任期間とは一味違うのではと感じています。

今、しみじみと先生のおかげなくしては、歴史博物館の自由闊達にして堅実な歩みは、実現できなかったと感じられ、感謝の言葉を尽くすことが出来ません。衷心よりご冥福をお祈り申し上げます。

（前神奈川県立歴史博物館長・薄井（うすい） 和男（かずお））

写真右が西川氏、左が筆者

資料紹介『宮地正彰関係資料』より明治屋と新条約実施祝典園遊会写真について

はじめに

本稿でご紹介する『宮地正彰関係資料』と呼ばれる資料群は、2022（令和 4）年度に寄贈された、横浜発祥の企業である明治屋に勤めていた宮地正彰（みやじまさあき）という人物が遺したものです。

明治屋は、1885（明治 18）年、磯野計（いそのはかる）が横浜万代町で創業しました。創業当時は、現在の明治屋のような店舗での小売業ではなく、船舶への雑貨納入を請け負う会社でした。諸外国との玄関口であった横浜港ならではの会社として出発した明治屋は、創業翌年から、西洋酒類・食料品・たばこ・食器類の直輸入を始め、徐々に卸小売業を中心に展開するようになります。さらに、同じく横浜発祥のビール会社であるジャパン・ブルワリー社と一手販売契約を結び、磯野没後の 1907（明治 40）年には「麒麟麦酒（キリンビール）株式会社」の設立に関与するなど事業を拡大していきます。以降、明治屋は横浜から日本全国に支店を展開し、キリンビールはもちろん、輸入ワインや食料品などを盛んに販売し、日本の洋酒・食料品卸小売業を代表する会社のひとつとなります。

本資料群には、明治屋が宮地に出した辞令や、当時使用されていたと思われる自社製品の宣伝が入った社用封筒、また横浜麒麟麦酒販売組合が販路拡大への尽力を称えて宮地に贈呈した感謝状など、明治屋の動向がうかがえる資料があります。さらに、宮地の息子である宮地正彦も明治屋に勤めており、本資料群中には正彦に出された辞令なども含まれています。資料名は『宮地正彰関係資料』としていますが、明治から昭和にかけて、親子二代に渡る資料群です。

宮地正彰と明治屋

宮地正彰は 1868（明治元）年に現在の高知県に生まれ、私立東京法学院（現中央大学）を 1890（明治 23）年に卒業しています。明治屋の入社時期は定かではありませんが、1898（明治 31）年には勤めていたことが賞与に関する資料からわかります。

また、1905（明治 37）年に門司支店へ転任して主事主任を務めていたことや、1911（明治 44）年取締役兼支配人に就任し、その後、1919（大正 8）年から翌年没するまで専務取締役を務めていたことが本資料群や明治屋の社史によって明らかになりました。その間、宮地は、横浜におけるキリンビールの販路拡大や月桂冠の一手販売契約に尽力するなど、明治屋の発展に大きく貢献しました。

本資料群には宮地本人の容貌を知ることが出来る写真が何点かあります。【図 1 】の写真は、洋服を着て布張りの椅子に座る宮地が写されています。背後には重厚な暖炉があり、大きな本棚が置かれ、豪奢な部屋であることが見てとれます。なお、裏面に 1899（明治 32）年の真夏に明治屋本店 2 階で撮影した、と宮地自身が書き込んでいます。

【図 1】宮地正彰の肖像写真

この写真が撮影された当時、明治屋本店は横浜市本町 1 丁目 13 番地（現在の本町通りを挟んで横浜市開港記念会館の向かい側）にありました。本店は西洋風の 2 階建てで、本資料群の中にも外観が断片的にわかる写真が何枚かありますが、このように内装の様子がはっきり写っている写真はこの 1 枚のみです。その他、『明治屋百年史』の中に本資料群の写真と同室で撮影されたであろう店員の集合写真が 1 枚ありますが、それ以外に確認できません。明治屋本店は、1923（大正 12）年の関東大震災で焼失しており、当時の建物は現存していません。そのため、この写真は後に明治屋の重役を務めた宮地の若き日の姿がわかるだけでなく、失われてしまった明治・大正期の明治屋本店について知る一助となる写真でもあります。

新条約実施祝典園遊会と明治屋

明治期において、関税自主権の放棄、治外法権など

【図 2】1899（明治 32）年 8 月 4 日　新条約実施祝典園遊会での集合写真

いわゆる不平等条約をいかに改正するかは大きな政治課題のひとつでした。1894（明治 27）年、第二次伊藤博文内閣の陸奥宗光外務大臣による日英通商航海条約締結によって、日本は領事裁判権撤廃および関税自主権の一部回復を果たします。その改正された条約の発効日である 1899（明治 32）年 8 月 4 日は、全国各地で新条約の祝賀行事が開催されました。横浜でも新条約実施祝典が開かれ、横浜公園では大規模な園遊会が行われました。

この新条約実施祝典園遊会について、『横浜貿易新聞』（1899 年 8 月 3 日号）は前日までに園遊会への参加申込人数が 830 名余り、招待客をあわせて 1,230 名ほどで、目標の 1,500 名に達していないと報じており、かなり多い人数の来場が見込まれていたことが分かります。この日の記事には、余興のほか飲食店、立食会場があること、特にビール店は 3 店舗あること、また「東京よりエビスキリンの各種麦酒店宛（ずつ）」が出店することも伝えられています。ここに登場する「キリン」はキリンビールのことを指します。

さて、本資料群にある【図 2】の写真は、現在の夏祭りなどで見る屋台のような模擬店を背景に、揃いの帽子をかぶり、同じく揃いの印半纏を着た人々が、めいめいにポーズをとって撮影されています。印半纏のえり部分に白字で「明治屋」と見えるでしょうか。またねじれてしまっているのぼりや同日に撮影された別の写真を確認すると、この模擬店が「キリンビール」を販売していたことがわかります。この写真の裏面には、「明治三十二年八月四日横浜官民有志ノ催シタル同市公園地ニ於ケル条約改正祝典園遊会模擬ビール店ノ真影横浜明治屋ノ担任シタル者ノ一」、つまり横浜公園で行われた新条約実施祝典園遊会へのキリンビール出店の様子を撮影した写真だと記されています。

『横浜貿易新聞』（1899 年 8 月 4 日号）は、園遊会当日についても横浜公園の周囲一帯には紅白の幔幕を張り巡らし、公園入口辺りに「園遊会」と記された看板を乗せたアーチが設置された会場の様子や、多くの外国人が馬車で公園内に乗り入れたこと、会場内では撃剣の源平合戦や花火、海軍軍楽隊の演奏の余興があったことなどを詳しく報じています。しかし一方で、残念ながら写真やスケッチ、記念絵葉書などはほとんど残されていません。この写真は、条約改正を祝った横浜の一日を映し出した貴重な記録であるといえます。

おわりに

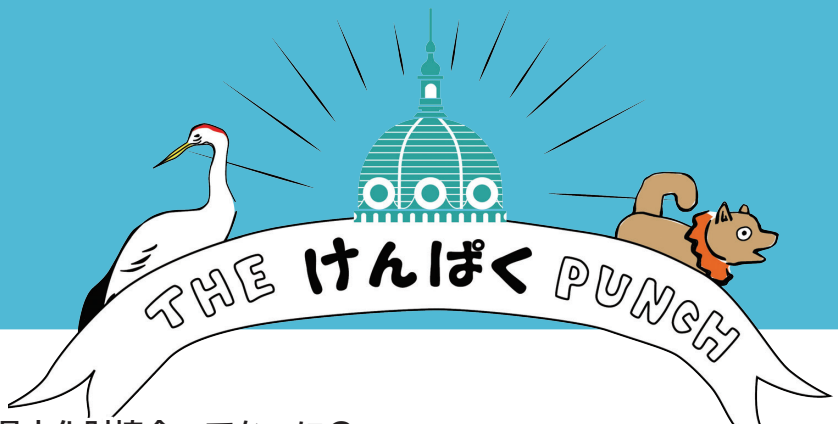
以上、『宮地正彰関係資料』から、1899 年に明治屋本店で撮影された宮地の写真、また同年に明治屋が新条約実施祝典園遊会でビール店を出店した写真を取り上げました。興味深い資料が多い『宮地正彰関係資料』について、今後も調査研究を進め、展示に反映できるよう努力したいと思います。

（非常勤学芸員・山下（やました） 春菜（はるな））

参考文献

・株式会社明治屋編『明治屋七十三年史』、1958 年
・株式会社明治屋創業一〇〇年史編纂委員会編『明治屋百年史』、1985 年
・横浜開港資料館『開港のひろば』65、1999 年
・『横浜貿易新聞』1899 年 8 月 3 日
・『横浜貿易新聞』1899 年 8 月 4 日

※資料における旧字は適宜新字に改めました。



神奈川県文化財協会ってなーに？

唐突ですが皆さん「神奈川県文化財協会」（以下文化財協会）ってご存じでしょうか？当館でも見学会をしているのをチラホラ見かけることがあります。一体どんな活動をしているのか、パンチの守が突撃リポート！

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

パンチの守（以下パ）：おっとそこの職員！お主は文化財協会を知っておるか？

担当職員（以下担）：よくぞ私に話をしてくださいました、県博の中で文化財協会事務局を担当しています！

パ:ほほう、県博の中に事務局がある団体なんじゃな。一体どんなことをしておるんじゃ？

担：会員を対象に県博の展覧会や県内外の史跡・文化財の見学会を開催したり、機関誌の『かながわ文化財』を発行しています。

パ：じゃから県博でもたまに見学会をしておったのか！どれどれ『かながわ文化財』を見てみるか…ん？118 号となっているが、一体いつから活動をしてきたんじゃ？

担：結構歴史がありまして、文化財保護法ができた昭和 20 年代の文化財を保護する機運の高まりの中で、有識者が中心となって 1954（昭和 29）年に発足した団体です。

パ：おお、では県博ができる前からじゃな。

担：そうなんです。1961（昭和 36）年には、文化財協会が県議会に提出した「県立博物館設立についての請願」が、1966（昭和 41）年の県立博物館設立に向けて大きな原動力になったそうです。文化財協会の事業は、当初文化財の研究と展覧会の開催が中心でしたが、時代の変化とともに、文化財の大切さを一般に啓発するための見学会や講演会にシフトしてきました。これまで県博から講師や事務局員の人的支援を受けながら活動していて、県博のサポーターでもあるんですよ。

パ：なるほどのう。興味がある方も多いと思うんじゃが、誰でも会員になれるのかのう？

担：もちろん！文化財の大切さを多くの人に知ってもらうことを目的にしているので、それに賛同して会費を納めた人は誰でも会員になれます！会員になると、前述の見学会・機関誌配布の他、県博ミュージアムショップの優待割引などの会員特典がありますよ。新会員の募集は、県博や県内図書館などにある会員募集チラシがわかりやすいので、是非手に取ってご覧いただきたいです。入会･資料請求は電話･メールでも承っていますよ（*bunkazai@kanagawa-museum.jp*）。

パ：博物館や文化財が好きな方にはなかなか魅力的な内容じゃな！

担：文化財に親しむ機会を通じて、文化財の理解者、愛好者が広まってほしいので、楽しみながら生涯学習をする場として文化財協会を活用してもらえると嬉しいですね！

（非常勤事務補助員・新井（あらい）　実（みのる）／
非常勤学芸員・市野（いちの）　悦子（えつこ））

2022 年 12 月 14 日鎌倉現地見学会　北条氏常盤亭跡

発行：神奈川県立歴史博物館　https://ch.kanagawa-museum.jp/　twitter　@kanagawa_museum
〒231-0006　横浜市中区南仲通 5-60　TEL　045-201-0926　FAX　045-201-7364
発行日：令和 5 年 5 月 30 日　印刷：株式会社 TAKT・JAPAN